

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	「きくこと」の積極的・本質的意味を意識して（1990年）
Author(s)	牧戸, 章
Citation	国語教育思想研究 , 28 : 45 - 46
Issue Date	2022-12-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053360
Right	
Relation	



「モモ」から

ミヒヤエル・エンデの「モモ」は、そのサブタイトルにあるように「時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にとかえしてくれた女の子のふしぎな物語」である。主人公モモが、どうして時間どろぼうから時間を取り返すことができたのか。その資格として与えられたものはなにか。それは次のような能力である。

小さなモモにできたこと、それは他でもありません、あいての話を聞くことでした。なんだ、そんなこと、とみなさんは言うでしょうね。話を聞くなんて、だれにだってできるじゃないかって。

でもそれはまちがえです。ほんとうに聞くことの出来る人は、めったにいないものです。そしてこの点でモモは、それこそ他にも例のない素晴らしい才能を持っていたのです。（大島かおり訳、岩波書店一九七六年九月、22ページ。原著は一九七三年刊）

この「ほんとうに聞く」ことのもたらす効果を登場人物の言葉から見ると、

「まともな考えがうかんで」くる。

「じぶんの意志がはっきりして」くる。

「勇気が出て」くる。

「希望とあかるさがわいてきます。」

というように、相手の内面に働きかけ、動かしていくものであることがわかる。そして、「おれはおれなりに、この世の中でたいせつな存在なんだ。」

と自己存在の確認にまでいたらせるのである。

「議論からの発想」

森本哲郎氏は長年の記者生活の経験から、取材を広くとらえて次のように述べている。

何かをしようとする人は、何よりもまずソクテラスの説いたあの「無知の知」を信条としなければならぬと、ぼくは思う。夢中で議論をする人は、とかく自分の知識や価値判断を絶対

的なものと思ひ込みがちだが、議論をつづけているうち、その「絶対」がいかにも「相対」であるか、いやというほど思い知らされるにちがいない。それが「無知の知」への第一歩である。

そうならば、ぼくらはあらためて、人の言うことに謙虚に耳を傾けようと、そう思うにちがいない。そうなったとき、その人はすでに立派な取材者になったわけである。なぜなら、取材とは要するに、人の話を謙虚にきくことだからである。（『「私」のいる文章』を新潮文庫一九八八年一二月、五五ページ。初出は、ダイヤモンド社一九七六年六月刊）

自己の対象化としての「きくこと」のはたらきである。

聞くことの中に聴くことを

「きくこと」は「聞く」と「聴く」に大別できる。この二つに分けると、ふつう、

「聞」 耳にはいる

聞こえる

「聴」 聞こうとして聞く

よく聞く

と「聴」の方に意図的・能動的意味を付している。したがって、「聴」は主体的で分析的である。

内田義彦氏は、「聞」に二通りの意味を持たせて、先日の「聞」と「聴」を統括する『聞』の「きく」を考えている。

「聞」のかんどころは、むこうから、きくまいと思って耳をふさいでも、否応なしに聞こえてくるというところにあるのです。（「聞と聴」山本安英の会『きくとよむ ことばの勉強 2』未来社一九七四年一二月、四九ページ。）

自然体の境地にある「聞」とでも言えるだろう。私たちは、例えばこのような「聞」のあり方を「きくこと」の目標として、そこへ達するためのすじみちを究明し、指導できることの内容と方法を組織していかなければならない。

内田氏は先の引用に続いて、

そうゆう「聞」に達するためにこそ、「聴」が必要なのですが、これがなかなかむつかしいので、聴と聞がバラバラになる。耳をそばだてて、あるいはチェック・ポイントをおいて聴かなければ人のいうことは聞こえてこない。がしかし、下手に聴くにこだわると、聴いても聞こえない、いや、聴けば聴くほど聞くことから遠ざかる、(同)

と述べ、単に「聴」が強調するだけでは、自分に都合の良いことしかきこえず、「聞」からはかえって遠ざかってしまうことを指摘している。

学校生活における子どもたちは、圧倒的に「聞くこと」に置かれる場が多い。その中で「聴」くべき場を計画的・意図的に設けていく必要があるのではないだろうか。この仕事を「きくこと」の学習の体系化の第一歩にすることも可能であると思う。そのためには「聴」に値するものを用意しなければならないことは当然である。

ところで、「モモ」のきくはドイツ語では

「zuhören」で、耳を傾けてきくという意味であり、どちらかというところ「聴」にあたる。ただ、そのさきの方は「あいての中にすっかり入りこむ」さき方であった。全人格的「聴」であり、「聴」の究極のあり方と言える。これは人間業の達し得ないところかもしれない。しかし、指導者である教師も「聞」くことができているか、まずは子どもの発することばをしっかりと「聴」く場を持っているか振り返ってみるのも無駄ではないだろう。

編集部注 初出

『月刊国語教育研究』25(217);1990年6月号
日本国語教育学会 編